

## 「黒川復興ガーデンとバイオアートー英彦山修験道と禅に習うー」プロジェクト案

九州大学芸術工学研究院  
 ソーシャルアートラボ  
 知足（ともたり）美加子

九州北部豪雨災害におけるレジリエンス回復のためのアートの可能性を探る。朝倉市黒川の「共星の里（廃校利用の美術館）」と協力し、**流れ着いた岩石、流木を活かした復興ガーデン**を制作する。英彦山修験道および禅の庭に習い、粘菌（森に生息する菌類）なども取り入れ企画・提案を行う。

本プロジェクトは「命」を潜思し、心安らぐ空間を、愛をもって共同で創造するものである。

2017年7月5日、九州北部豪雨災害が起こった。24時間約1000mmの降雨は大規模な山林崩壊を引き起こし、約21万トンの流木が土砂災害を拡大するという事態になった。朝倉市黒川にある「共星の里」（廃校利用の美術館）にも、巨石や流木が、美術館の野外スペースに押し寄せている。

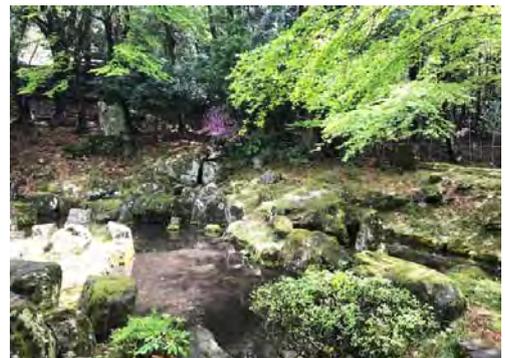
このような状況をうけ、甚大な豪雨災害からの復興を願い、「黒川復興ガーデンプロジェクト」を提案する。

黒川は英彦山修験道文化圏に属し、室町時代より英彦山座主院を大切に守ってきた地域である。自然を神仏として信仰してきた英彦山には、自然を凝縮し慈しむ石庭が複数存在する（知足は英彦山山伏の子孫）。災害直後の共星の里に訪れた際、流れ着いた巨石や流木に息を飲んだ。そのイメージを反芻する中で「縁ある石や木によって復興への意識空間（庭）を共同で創造する」という着想を得た。訪れた巨石や流木をできるだけ活かしながら、自然の縮図としての美しい空間をつくるのである。参加者が深く感じ、考えあわせる中で、人の意識と場が永続的につながることを目指す。

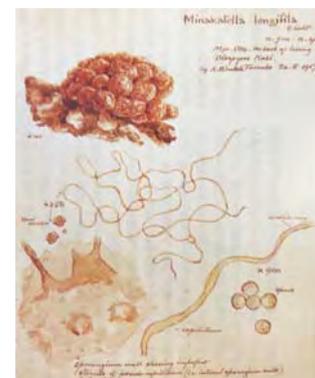
粘菌に関しては、20年前に熊野に参詣した際、南方熊楠顕彰館でその存在を知った。粘菌は動物的性質と植物的性質を併せ持つ原生動物であり、主に森に生息している（一つの細胞の内に無数の核が存在する多核体。胞子によって生殖を行い〈菌類〉、移動や捕食を行う〈動物〉）。また、迷路に放つと、最短の解をみつける知性をもつことで知られている。英彦山修験道は、自然を信仰の核におき（山川草木悉皆仏性）、水、植物、石、土（微生物）、気配にも神仏を見出した。古くから（縄文時代からの遺跡が存在）芸術文化の交流の場であった英彦山は、雪舟が作庭したものをはじめ多くの庭園が存在する。目に見えないものに宿る命の躍動を、訪れた人々に想像してもらうために、庭園に粘菌の存在を示唆する仕組みを作りたい。



「災害直後の共星の里」2017年7月26日



国指定名勝「雪舟庭園（旧亀石坊）」1476年



ロンギフィラ「熊楠が自宅の庭で発見した粘菌」

出典：荒俣宏他『南方熊楠』平凡社1995年p.75

「貴僧なども、人間と地獄とのことを手近くわかりやすく説かんとらば『涅槃経』の文句を粘菌の成敗で説かれよ」

「黒川復興ガーデンとバイオアート－英彦山修験道と禅に習う－」プロジェクト計画案

九州大学芸術工学研究院

知足（ともたり）美加子

【視察・講演会・ワークショップ】

(2018年7月1日)

プロジェクト始動にあたり、九州北部豪雨災害被災地の状況（黒川地区を中心に朝倉市、東峰村、添田町等）を視察する。

(10月7-8日)

朝倉市黒川「共星の里」主催事業（シンポジウム、ワークショップ）への協力、参加。

(10月26日) 復興の庭シンポジウムとワークショップ

【講演】 枡野俊明（禅僧、多摩美術大学教授）：禅の庭に関する根本的概念

○柳和暢、尾藤悦子（共星の里）：美術館の歴史や災害の状況報告

○知足美加子（彫刻家、山岳修験道学会評議員）：英彦山修験道に関する知識提供

○参加者による、造園にむけてのワークショップ：アイディアスケッチ、討論。

【共星の里の作庭】 (2019年)

造園家、禅、石彫家、製材業、土木などの専門家を交え、造園案をブラッシュアップする。具体的な作庭計画を参加者と共に討論する。

重機を入れ、土壌の整備と、石に関するレイアウトを決める。植樹等、手動でできるところは、参加者で行う。

【鑑賞、マインドフルネス、表現の分かち合い】 (2020年)

復興の庭を鑑賞し、マインドフルネスを行う。庭に生息する粘菌を観察し、足跡を追う。庭から発想し、様々な表現を行う。参加者は他者の表現をうけて、そこから別の表現を行う（音楽、写真、詩、絵、プロジェクションマッピング、インスタレーションなど）。お茶を味わいながら、庭の在りようおよび参加者のイメージーションのやり取りを楽しむ。